

# 早稲田大学 人間科学部 世界史 講評

## 〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	90分
特徴・その他	地図問題は去年に比べ大幅に易化。問題は11頁と去年の14頁より少なくなった。相変わらず正誤判定の文章は微妙な言い回しが目立ち、さらに決め手になるポイントが細かい。疲れる問題である。

## 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
I	イスラーム史の展開	ムハンマド時代からオスマン朝・サファヴィー朝・ムガル朝に至る諸王朝を概観。正誤は「正しい」ものを選ぶのが大半で、正しい文章は穏当な内容のものばかりである。	標準
II	清末(義和団～辛亥革命)の中国	④の英仏協商は1904年。⑤の四大綱領は「民権の伸張」ではなく「創立民国」。⑩の溥儀は、満州国崩壊とともにソ連軍にとらわれた後、中国で戦犯として獄中生活を送った。	標準
III	東欧史	①はクロアチア。07年時点トルコ・マケドニア・セルビアとともに加盟候補となっている。②はワルシャワではなくクラクフ。③はハンガリーではなくオーストリアが正しい。⑤は「帝国の解体をめざさない」が正しい。⑩のbはルーマニアが誤り。	難
IV	大航海時代以降から現代までの新大陸	③のcは「固定地代」が正しい。これは貨幣地代である。⑤のcのように、独立直後の南米が米国経済に支配されることはなかった。当時の米は西漸運動の真最中である。	標準
V	ナポレオン戦争・19世紀のヨーロッパ文化	Xのカント・ヘーゲルは順当だが、Yの文化史は難しいものが目立つ。とくに文学者・画家・音楽家については古典派・ロマン派などの区分に十分注意したい。⑤のゲーテはロマン主義ではなく古典主義、⑥のモーツァルトも同じ。Bの「標題音楽」はベートーヴェンではなくベルリオーズ(仏)である。こういうところは、作者と作品の関係ばかりに注意をとりられると見落としがちである。また人物と出身国も狙われている。⑥のシューベルトはドイツではなくオーストリア、⑧のマルサスはドイツではなくイギリスの人である。	難

[総合コメント]

今年はⅢの東欧史とⅤの19世紀のヨーロッパ文化の2問でどこまで得点を伸ばせるかで勝負がついた。標準的問題では差がつかない大学である。だからその標準的問題でのミスは許されないことはいうまでもない。さて、ⅢとⅤの正誤判定は難しい。まず、東欧のEU未加盟国などは時事問題に通じていないと対応不可能である。現代史のとくに直近の出来事は政経の資料集が有効。年度の後半に追加資料が出るからそこで確認するのが一番手っ取り早い。東欧のような地味な地域からこのように細かく出されてはたまらない。今後は中南米・19世紀の西アジアなども警戒される。Ⅴの文化史の正誤判定は難しかった。ここで点をとるには作者と作品といった表の要素に加え、出身国・ジャンルなどにも細かく目配りしたい。文化史は連続して出される可能性が高い。中国文化・イスラーム文化も含め入念な対策を講じたい。